

幼児の同年齢グループ内でのコミュニケーション : 年齢比較

東京外国語大学 上原 泉

Young Children's Style of Interaction among Peers : Age Differences.

Tokyo University of Foreign Studies UEHARA, Izumi

本研究では、3歳から6歳の子どもを対象に、同年齢の幼児のグループ内で行われるやりとりの様子を記録し、次のような結果を得た。第一に、やりとりがどれくらい続くかをみると、3歳と4歳では、誰かが言葉や行動を発しても、半分以上の割合で、誰も何の反応も示さなかったが、5歳では半分強の発信（発話、発声や行動の開始）に対して、6歳では約7割の発信に対して誰かが反応していた。第二に、応答の特徴をみると、発信者の言葉や行動を模倣する割合が、3歳では半分以上と高いのに対して、4歳では約2割、5歳と6歳では数%であった。第三に、発信の形態をみると、非言語的な発信の割合が、3歳、4歳では2割前後（それぞれ16%、23%）であったのに対して、5歳では1割、6歳で数%であった。本調査結果より、3歳から6歳の幼児期に、同年齢のグループ内で行われるコミュニケーションの基本的な形態が変わる様子が示唆された。

【キ・ワ・ド】 幼児、コミュニケーションの形態、同年齢のグループ、社会性

In this study, peer interactions were objectively measured in three-, four-, five-, and six-year-olds. In each age, 5.5-min activities within a group of 6-8 peers were recorded during a snack time. The results demonstrated three main age differences. First, three-year-olds responded to only less than 40% of utterances or actions, whereas turn-taking of utterances or actions was observed for about 50%, 60%, and 70% of all cases in four-, five- and six-year-olds respectively. Second, a significant age difference was observed in the rate of imitation of all the responses: more than 50% for three-year-olds, 20% for four-year-olds, and less than 5% for both five- and six-year-olds. Third, a significant age difference was also found in the rate of nonverbal actions of all activities. These results indicate that social interaction style among peers would change considerably during childhood.

[Key Words] Preschool children, Interaction, Peer group, Social competence.

はじめに

幼児間の社会的な相互作用については、従来から関心がもたれ、幼児同士(特に2人の幼児の間)で行われる会話や行動的なやりとりの様子が記録されてきた。具体的には、発声する、笑いかける、触れる、おもちゃの受け渡す頻度や(Howes, 1983)、感情表出の度合い(Fabes, Eisenberg, Jones, Smith, Guthrie, Poulin, Shepard, & Friedman, 1999)などが指標とされ、幼児同士が行う相互作用の質が中心に問われてきた(Howes, 1988; Eckerman & Didow, 1988)。状況に応じた相互作用の質の違いも検討され指摘されているが(例えば、おもちゃがあるときとない場合の1,2歳の子ども同士の相互作用の違い(Eckerman & Whatley, 1977)や、幼児同士が友人関係と知り合い関係の場合の違い(Brachfeld-Child & Schiavo, 1990))、乳幼児期の母子関係や教師—生徒間関係(ここで「教師」とは幼稚園や小学校の先生を指す)との関連から、質の良好さに主眼をおいた研究も多い。従来の研究によれば、乳幼児期の母子関係(親子関係)(Park & Waters, 1989; Putallaz & Heflin, 1990; Denham, Zahn-Waxler, Cummings, & Iannotti, 1991; Youngblade & Belsky, 1992他)や教師—生徒間関係(ここで「教師」とは幼稚園や小学校の先生を指す)(Pianta & Nimetz, 1991; Howes, Hamilton, & Philipsen, 1998)が、その時点またはその後に幼児が築く友人関係の質に影響を及ぼすといわれている。

従来より、幼児期のコミュニケーション内容について検討されてきているとはいえ、幼児が相互に行うやりとりの量や形態が発達に応じてどう変化していくのかに関する基礎的なデータには乏しい。特に、より他者志向的なコミュニケーションを行うように設定された状況下での(おもちゃ、ゲーム、課題などがない状況下での)、2人以上の幼児のグループ内で行われる相互のやりとりのパターンとその年齢差については、十分に調べられていない。そこで、本研究では、遊び道具がない状況で幼児がテーブルを取り囲むようにグループになって座るおやつの場面に注目し、そこで行われる幼児のやりとりの形態を記録し、比較することにした。このおやつのは、楽しい雰囲気であること、本格的な食事ではないため食べることに労力を費やし過ぎないこと、物を介さずに向き合っていることから、より他者志向的なコミュニケーションが生じやすい場面であると推測された。

方 法

対象者

保育園に通う3歳クラス45人(通称2歳児クラス、男児21人、女児24人:平均3.25歳:範囲2.78~3.70歳)、4歳クラス46人(年少組、男児17人、女児29人:平均4.19歳:範囲3.76~4.69歳)、5歳クラス40人(年中組、男児23人、女児17人:平均5.23歳:範囲4.72~5.72歳)、6歳クラス42人(年長組、男児25人、女児17人:平均6.25歳:範囲5.75~6.74歳)を対象に実施した。各年齢群において、おやつの中時間にランダムに形成されたグループを6組(従って全年齢群で計24組)を選び、そのやりとりの様子を記録した。各グループの構成人数は6人から8人で男女混合であった¹。

¹ 記録時に男児の人数が少なかったため、4歳の1組は女児のみであった。

手続き

おやつ時間に、ランダムに形成されテーブルを囲むように着席した、同年齢の子どもからなるグループを1つ選び、筆記と録画機器により、やりとりの様子を記録した²。5分半の記録をデータとして使用することにした。なお、やりとりの形態を把握することが目的であったため、記録や分析の際には、子どもの話した内容や行動の内容にではなく、発信（発言、発話、行動）に対する反応がどれくらい続いたか、発信が言語的であったか否か、他者の発信に対する反応が模倣であったか否か（オウム返し、模倣行動）に注意が払われた。

解析方法

各年齢において6グループのデータを合わせ、年齢ごとに分析をすすめた。まず次の4つの数値を年齢ごとにもとめた。

発信総数：グループ成員の子どもによる発信（発言、発声、行動）の総和。発信の長さによる区別はしなかった。ある一定時間、あるいは発信者が交代するまで、持続して同一人物により発信が行われても、その発信は1回と数えた。

やりとり総数：発信のひと続きを1つのやりとりとみなした場合のやりとりの総和。発信に対して何の反応もない場合も1つのやりとりとみなした（これを「発信者交代回数0」と呼ぶ）。

発信者交代回数別やりとり数：1つのやりとり内で話者が交代した回数を発信者交代回数とした。最初の発信に何の反応も続かなければ、話者交代がないので、発信者交代回数は0回とみなし、Aの発信に対しBが反応すれば1回、Aの発信に対しBが反応しさらにA（もしくはC）が反応すれば2回とみなした。すべてのやりとりを「発信者交代回数0」「発信者交代回数1」「発信者交代回数2～4」「発信者交代回数5以上」の4つのカテゴリーに分類し、各カテゴリーに分類されたやりとり数をもとめた。

反応総数：他者の発信に反応する形でなされた発信の総和。

上の4つの数値に基づき、さらに3つの数値を年齢ごとにもとめた。

発信者交代回数別比率：「発信者交代回数0」「発信者交代回数1」「発信者交代回数2～4」「発信者交代回数5以上」の各カテゴリーに分類されたやりとり数のやりとり総数に対する比率をもとめた。

模倣の比率：オウム返し、もしくは行動の模倣による反応の総和の反応総数に対する比率。

非言語的な発信の比率：非言語的な発信の総和の発信総数に対する比率。

以上のようにデータを処理し結果にまとめることにした。

² 諸事情によりいくつかのグループについては録画機の使用ができず録音機で記録したケースもあった。

結 果

(1) 発信総数の年齢差

同年齢の幼児が特に遊び道具がない状態で向かい合って座った場合に、そもそもどれくらい発信がなされるのか。また、年齢による違いはあるのか。それを確認するため、発信総数を年齢間で比較したところ、年齢間で有意な差がみられた ($F=63.6, p<.01$)。年齢別の発信総数を示したのが表 1 である。3 歳では発信総数が 6 歳の半分程度とかなり少なく、発信数は年齢にあわせて増えていく様子が伺える。事実、記録映像から受ける印象も 6 歳は一番活気にあふれているのに対して、3 歳は活動性をもっとも低く感じられた。

表 1 年齢別の発信総数

	3歳	4歳	5歳	6歳
発信総数	176	260	307	355

(2) 発信と他者の発信への反応にみられる年齢差

発信者交代回数別比率を年齢ごとにもとめた結果、図 1 のようになった。年齢間で有意な差がみられた ($F=50.2, p<.01$: 残差分析を行った³ところ「3 歳交代回数 0」「3 歳交代回数 1」「6 歳交代回数 0」「6 歳交代回数 1」「6 歳交代回数 5 以上」の 5 カテゴリーで $p<.01$)。誰かが言語や行動を発しても 3 歳では 64%、4 歳でも 51%の割合で何の反応もみられなかった (発信者交代回数 0)。5 歳では 59%の発信に対して、6 歳では 69%の発信に対して必ず誰かが反応していた。発信に対して誰も反応しない比率は、年齢とともに漸次的に減っていく様子がわかる。話者が 5 回以上にわたって代わる比較的長いやりとは、6 歳でのみ少しみられたが、他の年齢ではほぼ皆無に等しかった。

³ Haberman(1973)の計算方法により行った。

幼児の同年齢グループ内でのコミュニケーション

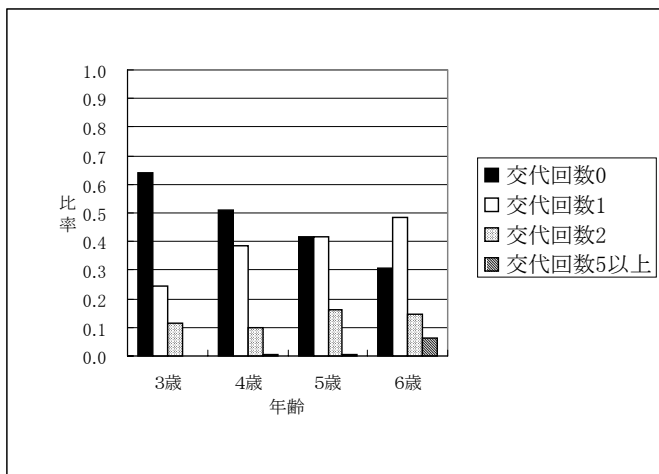


図1 年齢ごとの発信者交代回数別比率

では、発信に対して子どもが反応した場合、どのように反応しているのか。反応の特徴を探るため、年齢ごとに模倣の比率をもとめた。その結果、3歳で半分以上の52%と高く、4歳で20%、5歳で4%、6歳で2%となり、その比率にも有意な年齢差が認められた(図2参照、 $\chi^2=81.7, p<.01$)。3歳では、誰かが何かを発しても反応しないことが多いうえに、反応したとしてもその半分が同調するような形であることがわかる。3歳から4歳の差も大きいですが、4歳と5歳を境に、模倣的な反応は急激に減る印象がある。

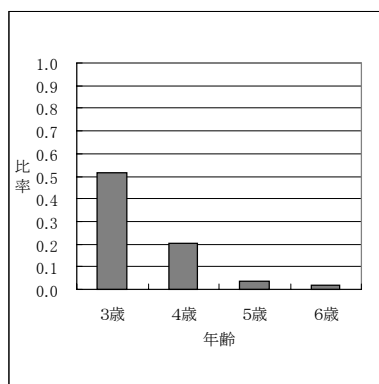


図2 模倣の比率

次に、発信の特徴に目をむけ、各年齢における発信がどれくらい言語的あるいは非言語的なのかを調べたところ、非言語的な発信の比率にも年齢間で有意な差がみられた($\chi^2=52.8, p<.01$)。図3に表したとおり、各年齢における非言語的な発信の比率は、3歳で16%、4歳で23%、5歳で10%、6歳で3%であった。3歳になれば十分に言語能力は発達しているのに、比率としてどの年齢でも非言語的な発信は多くないのは納得がいく。数値としては、4歳で一番高くなっているが、6歳で極端に非言語的な発信が減る様子が伺える。

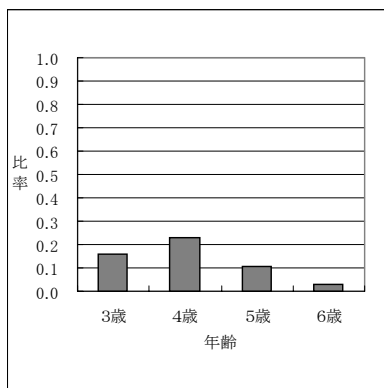


図 3 非言語的な発信の比率

考 察

以上の結果をまとめると次のようになるだろう。よく知っている間柄の幼児たちが対面して座っている状況下において発せられる発信数（発言，発声，行動）は，年長の幼児期よりも年少の幼児期において少なく，3歳から6歳へと年齢が増すにつれて，発信数は漸次的に増えていく。発信に目をむけると，どの年齢でも言語的発言の割合が圧倒的に高いが，年齢が低い場合のほうが，非言語的な発信の比率が高い傾向にあることが確認できた。発信に対する反応に注目してみると，次の2点が明らかとなった。第一に，年齢が低いほど，他者の発信に対する反応率が低かった。3歳では6割以上，4歳でもほぼ半分の発信に対して何の反応もなく，年長の子どもよりも社会性の低さが伺える。第二に反応の特徴であるが，5歳，6歳では数%ときわめて少ないのに対して，3歳で半分以上，4歳でも2割の反応がオウム返しや模倣行動であった。

誰かの発した言動に対して応答する割合が低く，応答があったとしても模倣が多いという4歳以下の幼児のやりとりについて少し考えたい。発信に対する応答の低さの原因は，応答しようとする意思の欠如にもあると思われるが，発信そのものが他者に向けられたというより独り言のようになされている傾向が強いことにあるのではないかと推測される。発信と反応の他者志向性の度合いと，応答の低さの関係については，今後検討すべき課題であるが，いずれにせよ，幼児期初期には，目の前の友人との間で積極的にコミュニケーションをとりたいという意思が欠如していることを本結果は示している。この結果は，3歳クラス（通称2歳児クラス）で日常的にみられる遊ぶ様子からすると，一見，矛盾するように思われるかもしれない。しかし，3歳クラスの遊び場面でのやりとりをよくみると，互いのエピソードを語りあっておしゃべりを楽しむような年長児や成人のコミュニケーションとは明らかに異なっている。ちょうどこの時期の幼児では，好きな友人が一貫しておらず個々の友人への認識が希薄である可能性を示した知見（Uehara, 2004）と考え合わせると，幼児期初期は，社会性に乏しく，人間関係への意識は希薄であるといつてもよいかもしれない。幼児期初期は，言葉が発達してきているので，やりとりは多彩になってきているとはいえ，乳児期に引き続き，相手に同調する，相手の行動を真似するという形のコミュニケーションの色合いがまだ少し強いのもかもしれない。3歳が

ら5歳頃の間には、他者理解、内面の理解がすすみ、社会性が増すと、コミュニケーション形態も変わっていくのではなからうか。

これらの点を明らかにするためには、今後さらなるデータの蓄積はもちろんのこと、もう少しコミュニケーション形態の詳細部分に関する量的分析が必要であると思われる。ただし、本研究を続けるにあたり、いくつかの問題の可能性に留意しておく必要があるだろう。例えば、午睡後の時間帯であったため、年齢が低いほど活動性が低くなってしまった可能性がある。本格的な食事場面ではなかったとはいえ、年齢が低い場合に、年長の子どもよりも、食べることにより集中していた可能性も考えられる。他の場面でのデータ採取と異なる視点からの分析の実施も視野にいれ、検討を続けたい。

引用文献

- Brachfeld-Child, S., & Schiavo, R. S. (1990) Interactions of preschool and kindergarten friends and acquaintances. *Journal of Genetic Psychology*, **151**, 45-58.
- Denham, S. A., Zahn-Waxler, C., Cummings, E. M., & Iannotti, R. J. (1991) Social competence in young children's peer relations: patterns of development and change. *Child Psychiatry and Human Development*, **22**, 29-44.
- Eckerman C. O., & Didow, S. M. (1988) Lessons drawn from observing young peers together. *Acta Paediatrica Scandinavica. Supplement*, **344**, 55-70.
- Eckerman, C. O., & Whatley, J. L. (1977) Toys and social interaction between infant peers. *Child Development*, **48**, 1645-1656.
- Fabes, R. A., Eisenberg, N., Jones, S., Smith, M., Guthrie, I., Poulin, R., Shepard, S., & Friedman, J. (1999) Regulation, emotionality, and preschoolers' socially competent peer interactions. *Child Development*, **70**, 432-442.
- Haberman, S. J. (1973) The analysis of residuals in cross-classified tables. *Biometrics*, **29**, 205-220.
- Howes, C. (1983) Patterns of friendship. *Child Development*, **54**, 1041-1053.
- Howes, C. (1988) Peer interaction of young children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, serial No. 217, 53, 1-88.
- Howes, C., Hamilton, C. E., & Philipson, L. C. (1998) Stability and continuity of child-caregiver and child-peer relationships. *Child Development*, **69**, 418-426.
- Park, K. A., & Waters, E. (1989) Security of attachment and preschool friendships. *Child Development*, **60**, 1076-1081.
- Pianta, R., & Nimetz, S. L. (1991) Relationships between children and teachers: associations with classroom and home behavior. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **12**, 379-393.
- Putallaz M., & Heflin, A. H. (1990) Parent-child interaction. In S. R. Asher & J. D. Coie

- (Eds.), *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge Univer. Press. Pp. 189-216.
- Uehara, I. (2004) Developmental changes in consistency of preferential feeling for peers and objects around age four. *Psychological Reports*, **94**, 335-347.
- Youngblade, L. M., & Belsky, J. (1992) Parent-child antecedents of 5-year-olds' close friendships: a longitudinal analysis. *Developmental Psychology*, **28**, 700-713.

< 付 記 >

本実験を実施するにあたり，御協力いただいた保育園の先生方，園児の皆様に深く感謝の意を表したい。なお，本研究は，平成 13,14 年度文部省科学研究費補助金「幼児における認知メカニズムと発達過程」(日本学術振興会特別研究員奨励費)，平成 16,17 年度文部省科学研究費補助金若手研究(B)「4 歳前後の幼児期にみられる認知発達の変化が後の記憶へ及ぼす影響」(課題番号：16730332；研究代表者：上原泉)の助成を受けて実施された。